

移行対象の研究史と展望—移行対象概念の曖昧さに関する一考察

岩 崎 美奈子*

A review of studies on the transitional objects : From the viewpoint of ambiguity

IWASAKI Minako

Abstract

Although Winnicott presented the concept of the transitional objects more than half a century ago, this concept is still relevant today and is researched extensively. Through the examination of previous studies on transitional objects, the purpose of this paper was to argue, that infant attachment objects are more complex than they seem at first glance. By incorporating the theory of Stern and Lacan, it was observed the transitional objects occur prior to the acquisition of language. Transitional objects touch on the realm of the unconscious, and they are experienced without being verbalized. Stern and Lacan showed that the transitional objects represent the transition to the subject speaking words. In addition, words do not reflect the complete true self, and the elements that cannot be expressed in words are included in the transitional objects. These elements are what makes the concept of transitional objects difficult to comprehend.

Keywords : transitional objects, Winnicott, ambiguity, language acquisition, unconscious

1 はじめに

乳幼児の愛着物が「移行対象 (transitional objects)」と名付けられたのは半世紀以上も前のことであるが (Winnicott, 1953)、現在においても移行対象概念は色褪せることなく、様々な研究が重ねられている。本論では、これまでの移行対象研究を概観し、乳幼児の愛着物として一見すると平易な現象と思われた移行対象が、検討するほどに複雑で難解な概念であることが明らかとなる沿革を提示する。そして、それは移行対象が言語獲得以前の現象であり、無意識の領域を含むためであるということを、SternやLacanの発達理論を援用して考察する。

2 移行対象について

2.1 移行対象とは

小児科医であり精神分析家でもあるWinnicottは、指しゃぶりなどの口唇愛的行動と組み合わせる形で毛布やぬいぐるみなど特定の対象に夢中になる様子を移行対象 (transitional objects)¹⁾ や移行現象 (transitional phenomena) という術語で説明し、それが子どもの情緒発達にポジティブな影響を与えることを明らかにしている (Winnicott, 1953)。移行対象は「乳幼児が肌身離さず持ち歩き特別な愛着を寄せる、最初の自分ではない所有物」と定義され、「移行対象は乳児側の移行を、つまり、母親と融合している状態から、母親の外部にあり

キーワード：移行対象、ウィニコット、曖昧さ、言語獲得、無意識

*平成22年度生 人間発達科学専攻

独立したものとして存在する状態への移行を表す」と、母子分離の際に分離不安に対する防衛手段として用いられる乳幼児の創造物であるとされる。

2.2 移行対象理論の主要概念—「錯覚—脱錯覚」と「中間領域」

Winnicott (1953) によると、母親は「原初的没頭 (primary maternal preoccupation)」により初めのうちは非常に献身的で、乳児の欲求にほぼ完全に適応している。そのため、乳児が創り出そうとするちょうどその時、その場所に実際の乳房が差し出され、乳児は自分の創造能力に対応する外的現実があるという錯覚 (illusion) を持つことができるようになる。しかし、その後少しずつ乳児の認知能力が発達すると、それに応じて適応の完全さを減少させる「ほどよい母親 (good enough mother)」の存在によって、内的世界と外的現実が魔術のようにいつも重なり合うわけではないという現実を体験することとなり、脱錯覚 (disillusion) のプロセスへと進んでいく。このような脱錯覚の過程において、乳幼児は思い通りにならない外的現実を知ることとなり、この時に移行対象を用いることで、これまで養育者との間で経験していた錯覚を反芻し、脱錯覚の不安や恐怖を乗り越えて一人でいられる能力 (capacity to be alone) を獲得できるとされる。

移行対象が置かれる場について、Winnicott (1953) は「体験することの中間領域 (the intermediate area of experiencing)」という場を指定する。移行対象はここで、内的対象 (魔術的に取り入れられた乳房) と外的対象 (母親の乳房) の両方と関連をもっているが、そのどちらとも明確に区別される「最初の自分ではない所有物 (the first not-me possession)」として発見されるのである。移行対象は歳をとるにつれて次第に忘れ去られるが、その要素は遊ぶこと (playing) という中間領域—芸術、宗教、夢などへと拡散し、現実受容という重荷を生涯背負い続ける人間の休息地として貢献し続ける (Winnicott, 1953)。

3 これまでの移行対象研究

3.1 移行対象の同定基準をめぐる議論

移行対象の同定基準は、移行対象の有無を判断するために非常に重要な指標である。しかし、Winnicott 自身がその多様性を重んじたこともあり、研究者によって異なるものとなっている。Winnicott (1953) は、母親は自分の外側にあって、自分とは別の何かであるという状態へ移行していく際に現れるものを移行現象とし、生まれたばかりの乳児が握りこぶしを口に入れる行動から、喃語や歌、リズムカルな身体運動、さらには母親自身をもその範疇であるとする。しかし、Gaddini & Gaddini (1970) は、「母親との分離後の再結合を象徴し、子どもによって発見、考え出されたもの」を移行対象と定義し、子ども自身の身体、おしゃぶりや哺乳瓶、母親の身体は、移行対象先駆物 (precursors of transitional object) として区別している。また、移行対象を持っている子どもは指しゃぶりをすることが多い (Hong & Townes, 1976; Mahalski & Silva, 1985; Wolf & Lozoff, 1989) が、牛島 (1982) は、即時的に満足を得られ、未だ対象となっていない指しゃぶりと、自らの想像力により表現可能な具体物としての移行対象とは本質的に異なり、指しゃぶりが本能的な与楽剤 (comforter) であるのに対して、移行対象は鎮静剤 (soother) として機能すると述べる。移行対象が外の世界に開かれているのに対して、指しゃぶりは子ども自身の領域でのみ繰り広げられる、閉鎖系の刺激サイクルになっており、移行対象のような他のものへと発展していく要素は指しゃぶりには見当たらないとされる。

Stevenson (1954) は、子どもが発見し、選び出した特定の物に愛着を示すようになる時期が1歳前後と2歳前後に集中することを見出し、それぞれを、一次的移行対象と二次的移行対象と呼んで区別している。これを踏まえ、Buschら (1973) は、1歳頃と2歳頃では物の永続性の獲得など認知様式が質的に異なるという観点から、それらを厳密に区別することを試みている。しかしこの基準は制限がありすぎるとして、Gaddini (1975) や Coppelilo (1976) などから批判を受けている。

以上のような流れを受けて、Hong (1978) は、様々な移行段階に現れ、移行的様式の体験や内的および外的現実の双方を体験する中間領域を提供するあらゆる現象を「移行現象 (transitional phenomena)」と再定義している。そして、移行対象先駆物などの移行対象等価物 (transitional object equivalent) が現れる生後3ヶ月頃の「第一の過渡期」、一次的移行対象が現れる1歳半を過ぎた頃の「第二の過渡期」、二次的移行対象が現れ

る2歳前半頃の「第三の過渡期」という3つの過渡期を示し、それぞれの発達的特徴を考察している。しかし、黒川（2004）が、「移行」には母子分離や無統合から統合へという目的や方向をもつ移行と、目的をもたない移ろいの体験としての移行が含まれていると指摘したように、移行対象が発達の視点だけでは分類できない性質を帯びているために、Hong（1978）自身も、この3つの分類は曖昧であるとしている。また、Greenら（2004）は、移行対象の所有と離乳時期との関連を指摘し、母親の乳房以外の移行対象先駆物や移行対象等価物は移行対象に含めるべきだと主張している。さらには、Horton（1981）のように、触れ得る、触れ得ない、生、無生ということには関係なく、移行的な体験様式で意味をもつものは全て移行対象と捉える立場もあり続けており、狭義の移行対象と、移行対象等価物を含めた広義の移行対象が機能的に同質のものか否かという点については、いまだ議論の余地がある。

3.2 普遍的な健康の指標としての移行対象をめぐる議論

Winnicott（1953）は移行対象について、健康で普遍的な現象であるとしているが、それを裏付けるように、Buschら（1973）は67.5%の子どもの移行対象が現れることを明らかにし、Litt（1986）も77%、Mahalski（1983）は74%に移行対象の使用を認めている（表1）。井原・木村（1986）によれば、欧米圏の移行対象の発現率は平均66%と高率であり、移行対象の普遍性を支持する論拠としている。また、Provenceら（1961）は、施設児に移行対象を持つものが少ないことを示し、その理由を、母性的関わり不足により象徴的に代理する表象を確立することができず、移行対象を創り出すことが困難なためであるとして考察している。Mannoni（1982）も、ある許容域を越えて母親から離れる時間が長くなる時に母親を内的表象として保つことができず、移行対象を創造できなくなると述べる。また、心身症の子どもに移行対象発現率が低いことを指摘したGaddini（1979）は、そ

表1 移行対象の発現率

文献	対象者数	対象者	対象国	発現率
Gaddini & Gaddini (1970)	682 (Rural), 450 (City), 52 (Foreign)	母親	イタリア	4.9% (Rural), 31.1% (City), 61.5% (Foreign)
Hong & Townes (1976)	169 (U.S.), 50 (U.S.K.), 60 (Korea)	母親	アメリカ, 韓国	毛布: 54% (U.S.), 34% (U.S.K.), 18% (K) ぬいぐるみ: 24% (U.S.), 22% (U.S.K.), 50% (K)
Sherman et al. (1981)	171	9-13歳	アメリカ	54%
Litt (1981)	285	母親	アメリカ	77% (middle class), 46% (low SES)
Kleoner (1983)	180	母親	イスラエル	27%
Mahalski (1983)	1197	母親	ニュージーランド	2歳: 74%, 3.5歳: 63%, 5歳: 53%, 7歳: 43%
藤井 (1985)	415 (男児205, 女児210)	母親	日本	31.1%
Shafii (1986)	230 (男子119, 女子111)	13-14歳	アメリカ	女子88%, 男子71%
遠藤 (1990)	951	母親	日本	38% (男児32.8% < 女児43.9%)
中根 (1994)	91	大学生	日本	54.9%
Eytan et al. (1998)	871 (男子375, 女子496)	平均16.7歳	イスラエル	30.4%
森定 (1999)	343 (男子121, 女子222)	平均23.3歳	日本	62% (男性35% < 女性77%)
森定 (2001)	804 (男子430, 女子374)	平均13.2歳	日本	35% (男子24%, 女子48%)
Hobara, M. (2003)	100 (日本, 男児27, 女児23; アメリカ, 男児29, 女児21)	母親	日本, アメリカ	日本38%, アメリカ62%
Green, K.E., Groves, M.M., Tegano, D.W. (2004)	275 (211名が高接触群)	母親	アメリカ, カナダ	18.2%
池内・藤原 (2004)	211 (男児115, 女児93)	母親	日本	39.8% (男児38.79%, 女児41.1%)
黒川 (2004)	296 (男児154, 女児142)	母親	日本	33.4%
石谷 (2005)	66	大学生	日本	35.4%
富田 (2007)	261	保護者	日本	31%
服部 (2008)	314 (男子156, 女子158) + 154 (男子56, 女子98) + 384 (男性121, 女子263)	中・高・大学生	日本	中学生35%, 高校生40.3%, 大学生45.6%
Erkolahti et al. (2009)	1054 (男子465, 女子589)	平均14.5歳	フィンランド	男子18% < 女子37% (現在の所有率)

れは象徴化能力の未発達を表れており、その結果、身体という次元に即時的に表現してしまわざるを得なくなったとしている。井原（1988）も心身症児とその同胞の移行対象発現率を調べ、心身症児本人が32.5%であるのに対してその同胞は58.8%であり、同胞の方が有意に多く移行対象を所有していることを報告している。また、Triebenbacher & Tegano（1993）は乳幼児の行動観察を行い、移行対象が不安を鎮め、分離を促すことを実証的に示している。加えて、Sherman & Hertzog（1983）やJonsson & Taje（1983）が精神遅滞児や発達障害児に移行対象の発現率の低さを指摘したことから、移行対象が健康的な発達の指標として取り上げられたのである。その後の発達段階においても、Arkema（1981）は、境界性人格障害の患者が、幼児期に移行対象を経験した割合が低率であることを報告しており、Hortonら（1974）やLobel（1981）も、人格障害者、特に境界性人格障害者が移行対象を所有していない傾向を明らかにしている。このような、幼少期に移行対象を所有していた者の方がそうでない者よりも精神的に健康であるという結果は、移行対象が子どもの情緒発達において健康で普遍的であるというWinnicottの見解をより一層支持し、移行対象が発達の達成における目に見える指標となり得るということを実証するとされている。

3.3 移行対象の発現率の文化差をめぐる議論

しかし、主な移行対象研究をまとめた表1を見ると、移行対象の発現率には文化差がみられることがわかり、Winnicottが主張したように、移行対象を必然的な発達ライン上に位置付けることに関しては批判的な再検討が必要となってくる。これに対して、遠藤（1990）は、移行対象への愛着を示さない子どもにはその能力の欠損に起因して移行対象を使用し得ない、（欧米における移行対象欠如例のような）より病的色彩の濃い子どもと、潜在的にはその能力を有しながらも、単に必要とされる状況にさらされないがゆえに使用する必要のない、健常な発達の枠内にある子どもの両者を峻別して仮定すべきだとしている。

文化差が生じる要因としては、Gaddini & Gaddini（1970）やHong & Townes（1976）が、授乳様式や就眠様式、身体接触の多少などを挙げており、Hong（1978）は、①養育者との就眠様式、②就眠時の様子、③授乳様式、④身体接触の頻度や程度の4項目にまとめている。これらの指摘はある程度支持されている（Greenら、2004；遠藤、1990、1991など）が、Hobara（2003）の調査では、移行対象の発現率と「母親が子どもの思い通りになる時間」に違いがないことを指摘している。また、富田（2007）は、母親のかかわりが減衰しやすい中間子において移行対象の発現率が低いことを指摘し、中村（2004）は、別室就寝と移行対象との間に関連はないことを報告している。これらの結果は、母親との直接的な接触頻度を最有力とする移行対象の発現仮説に疑問を呈するものである。Litt（1986）は、移行対象研究を概観し、就眠場所、授乳様式、性別、生まれた順番、兄弟の数、離乳年齢、養育者の数と移行対象の発現率には関連がないことを指摘し、関連があるのは、社会的経済的に中流から上流に位置することと、養育者の教育レベルや子どもを尊重する（child-centered）態度であると述べている。

移行対象の発現機序を子どもの外的な環境因のみで捉えようとする研究に対し、遠藤（1991）は授乳様式（外的なストレスの指標）と子どもの不安に対する反応性の閾値（気質）との関連性を指摘し、移行対象の発現機序として、「母子のほど良い関係」→「母親の内的表象の獲得」→「母子関係の気質・愛着欲求が相対的に満たされない状況」→「母親の代理・適応の術としての移行対象の必要」という図式を仮定している。さらに、池内・藤原（2004）は遠藤（1991）を援用した発現過程モデルを示し、その決定因を、「内的表象の獲得」と「不安に対する許容範囲」から説明する。しかし、移行対象の機能、すなわち、養育者を象徴的に代理し分離の不安を慰める機能や、移行対象の発現に際する3つの過渡期（Hong, 1978）からは、内的表象の獲得が前提となって移行対象が現れるのではなく、むしろ、内的表象の獲得は、移行対象との関係の中で段階的に達成されるものだと考えられる。さらには、そもそもの曖昧な同定基準が発現率の違いを生みだしたとも考えられる（遠藤、1990）。Winnicottは移行対象を具体物に限定せず、母親の子守唄や身体の一部をも含めていたが、母親の身体や子ども自身の身体、おしゃぶりや哺乳瓶に関しては、Gaddini & Gaddini（1970）が狭義の移行対象から除外し、移行対象先駆物としている。また、Hong（1978）は移行対象等価物を設け、幼児の外側にあり具体的な無生物の対象である移行対象は区別している。そのため、上述の同定基準の問題に戻るが、研究者が何を基準に移行対象と同定するかによって、発現率に差が生じるのである。

3.3.1 日本における移行対象

日本における狭義の移行対象の発現率は、藤井（1985）で31.1%、遠藤（1990）で38.0%、Hobara（2003）で38.0%、黒川（2004）で33.4%であり、約3割と低率である。その理由について、遠藤（1990, 1991）は、母親の養育態度（授乳様式や就眠様式）や母子間ストレスとの関係で考察し、移行対象は、育児習慣などの文化的背景を持ちながら、母性的関わりを中心とする様々な環境側の外的要因と、子ども自身の気質などの内的要因とが合わさり、その子どもにとって相対的にストレスが多いかどうかによって、移行対象を必要とするか否かが決まるとしている。しかし、それを踏まえて黒川（1999）は、その子どもにとってストレスが相対的に少ない環境にあったために、適応の術としての移行対象を必要としなかったのか、それとも、狭義の移行対象では捉えきれない何か他のものを必要としていたのかは検討されず、これまでの移行対象研究で懸念となっている養育環境の問題と同定基準の問題は、同一文化内においても同様には解決されないままであると述べる。

3.4 青年期以降の移行対象

幼児の移行対象は徐々に、特に文化的関心が発達するに従いエネルギーが備給されなくなる（Winnicott, 1953）。先行研究においても、可視的な移行対象は3歳以降、遅くとも6、7歳にはその役目を終えて文化的な活動へ拡散していくとされる（Winnicott, 1971; Litt, 1986）。一方で、ErkolahtiとNystrom（2009）は、平均14.5歳の対象者の28.7%が移行対象を現在も所有していることを報告し、Bacharら（1998）は、平均16.7歳の対象者のうち、家を離れる時やストレスフルな状況時に移行対象を使用する人が13%いることを報告している。Downey（1978）は、幼児期の移行対象と思春期の移行対象は、密接に関係している反面同一のものではないと指摘し、幼児期における移行対象や移行現象が思春期に多様化し、それらが音楽、映画などの文化芸術領域の形をとって移行現象として拡散する過程について論じている。このような発展・拡散した移行対象について、日本では森定（1999; 2001）が「慰める」という共通の心理的機能をもつ一つのカテゴリーとして捉えて、「慰める存在（Solace）」として位置づけている。

青年期以降の移行対象研究では、臨床例を用いた研究も多くみられる。FreeとGoodrich（1985）は、移行対象が青年期において初めて使用された場合に精神病理や治療状況と関連があるとし、精神病理群にとっての移行対象へのアタッチメントは、分離の問題の解決や青年期の自己感などを発達させるのを助ける機能があるとしている。また、Tabin（2005）は、治療における青年期の移行対象や移行現象は自律的自我（autonomous ego）の出現のサインであり、深いレベルの情緒的体験（emotional experience）に達したことを示し、クライエントが、子どもと自立した大人になることとの間のギャップに橋をかけようとする自己イメージについての情報をセラピストにもたらしとしている。またSteude（1985）は、青年期においての移行現象の重要性を述べ、境界例だけでなく、全ての青年期のクライエントとの治療において、移行現象はセラピーの進展を示していると述べる。さらに、ArthernとMadill（1999, 2002）は、大人を対象とした心理療法の中での移行対象の機能について、クライエントとセラピストの関係を強化することだとし、治療場面での移行対象の出現を歓迎している。日本においても、例えば、自閉対象から移行対象への変遷をみた自閉症児の事例（古市, 2008）や、セラピストが移行対象となった境界例の事例（山下, 2009）などが報告されている。

4 無意識の場における移行対象

先行研究では、移行対象の定義や同定基準、出現要因など、移行対象概念の様々な側面を巡って数多く議論されてきたが、明確な結論は導き出されていないといえる。移行対象概念が明確な線引きを許さず一筋縄では行かない所以には、移行対象が内的主観的世界と外的客観的現実を併せ持つ中間領域で生じ、無意識を内包しているためだと考えられる。本項では、乳幼児の自己感を定義したSternと、人が話す存在となる過程について理論化したLacanを援用し、移行対象が無意識、すなわち、言語化されずに潜行した部分を体験できる現象であるために難解な理論となっていることを明らかにしたい。

4.1 自己感の発達過程における移行対象

Stern (1985) は、「私たちは自分たちの体験を、それが何か独特で主観的なオーガナイゼーションに属すると思えるようなやり方で、本能的に加工処理します。この主観的オーガナイゼーションを、通常自己感と呼びます」と自己感を定義し、乳幼児の発達段階に応じた4つの自己感を検討している。Sternが移行対象について言及しているのは、「言語自己感 (the sense of a verbal self)」においてである。言語自己感は生後2年目に言語の発達にともない、自己を客観視する、象徴を用いる、願望を抱くなどの能力を獲得する時期に形成される自己感とされる。言語の獲得は、乳児を「より広い文化の会員」とさせる一方で、これまでの「無様式の総括的体験を粉砕するもの」であり、言語化されない部分は潜行し、これが無意識を生むとしている。Sternは言語自己感を検討する際に、2歳の誕生日を迎える前後の女兒の「お寝床でのお話」において、「移行現象に没頭している」様子を提示し、お話は彼女の内部に存在する養育者を再活性化するだけでなく、言語の練習にもなっていたことを考察している。すなわち、お話は言語自己感の確立に寄与する移行対象であるが、そこには、言語自己感以前の体験、すなわち、「無意識への道」が内包されていると考えられる。

4.2 言語活動 (ランゲージ) における移行対象

LacanはFreudの糸巻遊びで、「オーオー」が「Fort Da」へと移行する過程を、「象徴界 (言語秩序) への主体の移動」と、「言葉の誕生に結びついた無意識の成立」という側面から捉えている (Lacan, 1966/1972)。Freud (1920) は孫のエルンストが、母親が外出するときに木製の糸巻をベッドの下に投げ込んで「オーオー」と意味ありげに叫び、そこから紐をひっぱって糸巻を引き出し、「ダー」と嬉しそうに言う遊びを繰り返すことを観察し、「いない (fort) - いた (da)」遊びとして意味を見出した。現実には不在の時には存在しない母親を、遊びの中では不在においても「不在」として表象することにより、存在を獲得していると捉えたのである。Lacan (1966/1981) は移行対象について、「母子一体の状況からの分離において機能する母の乳房」であり、その意味で、「移行対象は去勢を予示する離乳の役割を果たすものである」としている。糸巻遊びの例で言えば、糸巻や「Fort Da」が移行対象であり、それは母子分離を促し言語への移行を表している。そして、この言語の獲得と無意識は結びついており、無意識は言語構造をもつというのがLacanの主張である。一方で、言語＝象徴を手に入れると、「存在そのもの」、「現実」からは決定的に隔てられ、「ママと呼びかけた瞬間、現実の母親は殺害されることとなる」 (斎藤, 2012)。つまり、言葉を話すということは、それ以前にはあった母親とのプリミティブな情動体験を失うことを意味するのである。Lacan派のDolto (1987) は、「移行対象で最良のものは、結局は言葉なのです」と述べ、言語獲得の初期に現れる完全に象徴的なものになる前の言葉は、離乳以前の触覚的感覚を持つ移行対象であることを指摘している。すなわち、移行対象は言葉でありながら、言葉として象徴化され得ない点で無意識をも内包していると考えられる。

4.3 無意識の情動を内包する移行対象

SternとLacanにおいて、移行対象は言語を用いる主体への移行を表していること、加えて、言語が真の自己を完全には反映しないことが示唆されている。つまり、言語で表現できない残余物が移行対象には備わっていると言えるのである。その残余物こそ、Dolto (1987) が指摘した、「離乳以前の触覚的感覚」というプリミティブな情動体験である。石谷 (2007) は言葉について、「それが情動の媒介物ともなっこそ、言葉を用いる心理療法も効果を生む」と述べているが、心理療法においてみられる移行対象も、まさにこの意味で効果を生んでいると考えられる。移行対象は、Kohut (1971) 自身も示唆するように、「自己対象 (self object)」²⁾ との類似性が指摘されるが、差異をここに見いだすことができよう。Kohutの発達論は中核自己 (nuclear self) の成立する2歳から始まっており、それ以前は、「断片的 (fragmentary) 自己」が遡行的に想定されているに過ぎない。すなわち、言語獲得以前のプリミティブな情動体験を含む無意識の領域は仄めかされているに過ぎず、自己対象には離乳以前の母子関係の残余は含まれていない。それゆえに、移行対象概念は明確な線引きが困難である一方で、自己対象概念は類型化され得るのではないだろうか。

5 おわりに

本論では、移行対象研究を概観するなかで浮き彫りとなった移行対象概念の曖昧さについて、それが内包する無意識の存在を考察した。定義や同定基準などが議論された先行研究は、移行対象を言語で完璧に表そうとしたために苦心したのではないだろうか。Freud (1900) が示唆したように、無意識を紡ぎ出す言語は、そこに意味はあるけれどもそれだけでは理解しようがない。そうであるからこそ、無意識を内包する移行対象概念の理解は一筋縄ではいかず、際限のない掘りみをみせ、関心を集め続けるのではないだろうか。

<註>

- 1) transitional objectsの「transitional」の邦訳について、橋本 (1979) および北山 (1990) では「移行」という訳語を用いており、現在、一般的にはこの邦訳が用いられている。しかし、牛島 (1982) はそれを「過渡」と訳し、その理由について、「過渡」には「移行」という言葉が持つ「移り行く」という意味に加えて、「旧いものから脱して新しいものへ移る」という意味が含まれていると述べ、「移り行く」だけではあまりにも現象的で、transitional objectsのtransitionにはこの加えられた意味がほしいとしている。また、北山 (2003) も、「移行」という訳語を用いながらも、transitionがもつ「はかなさ」や「通り過ぎていく」という情緒的な意味を考察し、「日本の移行対象は過渡的である」と述べている。ここでは、transitional objectsの邦訳として一般的な、「移行対象」という訳語を用いることとするが、このような論を参考に、transitionのもつ過渡的な部分も移行対象の重要な要素として認識しつつ論を進めていくこととする。
- 2) 「自己対象」とは、Kohut (1971) によると「対象が自己と分離、独立したものとして経験されていないような体験様式」のことであり、原初的には乳幼児と養育者との共感的関係において体験される。通常、乳幼児期に体験されていた「自己対象」は、共感的対応を通して非人格化された機能へと「変容性内在化」をとげるが、共感不全が起こった場合には内在化されずいつまでも自己対象を希求するようになると思われる。

<文献>

- Arkema, P.H. (1981). The borderline personality and transitional relatedness. *The American Journal of Psychiatry*, 138(2), 172-177.
- Arther, J., & Madill, A. (1999). How Do Transitional Objects Work?: The Therapist's view. *British Journal of Medical Psychology*, 72, 1-21.
- Arther, J., & Madill, A. (2002). How Do Transitional Objects Work?: The Client's view. *Psychotherapy Research*, 12, 369-388.
- Bachar, E., Canetti, L., Galilee-Weisstub, E., Kaplan-DeNour, A., Shalev, A.Y. (1998). Childhood vs. adolescence transitional object attachment, and its relation to mental health and parental bonding. *Child Psychiatry and Human Development*, 28(3), 149-167.
- Busch, F., Nagera, H., McKnight, J., Pazzarossi, G. (1973). Primary Transitional Objects. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 12, 193-214.
- Coppolillo, H.P. (1976). Maturational Aspect of the Transitional Phenomenon. *International Journal of Psycho Analysis*, 58, 479-486.
- Dolto, F. (1987). Dialogues Québécois. 小川豊昭・山中哲夫 (訳)(1994). 子どもの無意識. 青土社.
- Downey, T.W. (1978). Transitional phenomena in the analysis of early adolescent males. *Psychoanalytic Study of the child*, 33, 19-46.
- 遠藤利彦 (1990). 移行対象の発生因の解明—移行対象と母性的関わり. 発達心理学研究, 1, 59-69.
- 遠藤利彦 (1991). 移行対象と母子間ストレス. 教育心理学研究, 39, 243-252.
- Erkolahti, R., & Nyström, M. (2009). The prevalence of transitional object use in adolescence: is there a connection between the existence of a transitional object and depressive symptoms?. *European Child & Adolescent Psychiatry*, 18(7), 400-406.
- Free, K., & Goodrich, W. (1985). Transitional object attachment in normal and in chronically disturbed adolescents. *Child Psychiatry and Human Development*, 16, 30-44.
- Freud, S. (1900). Die Traumdeutung. 高橋義孝 (訳)(1968). 夢判断. フロイト著作集 2. 人文書院.
- Freud, S. (1920). Jenseits der Lustprinzips. 井村恒郎・小此木啓吾 (訳)(1996). 快感原則の彼岸. フロイト著作集 6. 人文書院. 150-194.
- 藤井京子 (1985). 移行対象の使用に関する発達の研究. 教育心理学研究, 33, 106-114.
- 古市真智子 (2008). 自閉症児の初期発達における「数字に対する強い関心」がもつ意味. 心理臨床学研究, 26(5), 592-602
- Gaddini, R. & Gaddini, E. (1970). Transitional object and the process of individuation. A study in three different social groups.

- Journal of American Academy of child Psychiatry*, 9, 347-365.
- Gaddini, R. (1975). The concept of transitional object. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 14, 731-735.
- Gaddini, R. (1979). Early psychosomatic pathology. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 31, 121-127.
- Green, K., Groves, M., & Tegano, D. (2004). Parenting practices that limit transitional object use: an illustration. *Early Child Development & Care*, 174, 427-436.
- Hobara, M. (2003). Prevalence of transitional objects in young children in Tokyo and New York. *Infant Mental Health Journal*, 24(2), 174-191.
- Hong, K.M., & Townes, B.D. (1976). Infant's attachment to inanimate objects: A cross-cultural study. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 15, 49-61.
- Hong, K.M. (1978). The transitional phenomena: A theoretical integration. *Psychoanalytic Study of the Child*, 33, 47-79.
- Horton, P.C., Lony, J.W., Coppolillo, H.P. (1974). Personality disorders and transitional relatedness. *Archives of General Psychiatry*, 30, 618-622.
- Horton, P.C. (1981). *Solace: the Missing Dimension in Psychiatry*. The University of Chicago. 児玉憲典 (訳)(1985). 移行対象の理論と臨床—ぬいぐるみから大洋体験へ. 金剛出版.
- 井原成男・木村涼子 (1986). 移行対象の発達の意味—移行対象の様々な表れ方をした2症例からの検討. *小児精神と神経*, 26, 57-63.
- 井原成男 (1988). 移行対象の発達の意味(4)—心身症児とその同胞にあらわれた移行対象. *小児の精神と神経*, 27(3), 29-34.
- 池内裕美・藤原武弘 (2004). 移行対象の出現・消失に関する心理学的規定因の検討—生育環境と夫婦間ストレスの視点から—. *社会心理学研究*, 19, 184-194.
- 石谷真一 (2007). 自己と関係性の発達臨床心理学—乳幼児発達研究の知見を臨床に生かす. 培風館.
- Jonsson, C. & Taje, M. (1983). "Good enough" mothering and the incidence of transitional objects after infantile colic. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 22, 545-548.
- 北山修 (2003). インタビュー/ウィニコットと日本語臨床. 妙木浩之 (編) ウニコットの世界. 現代のエスプリ別冊. 至文堂.
- Kohut, H. (1971). The analysis of the self. 水野信義・笠原嘉 (監訳)(1994). 自己の分析. みすず書房.
- 黒川嘉子 (1999). 乳幼児の就眠時行動に関する理論的考察—狭義の移行対象論から自己調節論へと視点をうつして. *京都大学大学院紀要*, 45, 342-352.
- 黒川嘉子 (2004). 移行対象・移行現象に関する2つの視点. *心理臨床学研究*, 22, 285-296.
- Lacan, J. (1966). *Écrits*. 宮本忠雄・竹内迪也・高橋徹・佐々木孝次 (訳)(1972). エクリ I. 佐々木孝次・海老原英彦・葦原春 (訳)(1981). エクリ III. 弘文堂.
- Litt, C.J. (1986). Theories of transitional object attachment: An overview. *Internal Journal of Behavioral Development*, 9, 383-399.
- Lobel, L. (1981). A study of transitional objects in the early histories of borderline adolescents. *Adolescent Psychiatry*, 9, 199-213.
- Mahalski, P.A. (1983). The Incidence of Attachment Objects and Oral Habits at Bedtime in Two Longitudinal Sample of Children Aged 15-7 years. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 24(2), 283-295.
- Mahalski, P.A., Silva, P.A., Spears, G.F. (1985). Children's attachment to soft objects at bedtime, child rearing, and child development. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 24(4), 442-446.
- Mannoni, M. (1982). D'un impossible a l'auture. 松本雅彦・山口俊郎・西田稔 (訳)(1984). 母と子の精神分析. 人文書院, 36-37.
- 森定美也子 (1999). 乳幼児期から青年期までの移行対象と慰める存在. *心理臨床学研究*, 16(6), 582-591.
- 森定美也子 (2001). 思春期における慰める存在: 移行対象の観点から. *心理臨床学研究*, 19(5), 535-541.
- 中村俊哉 (2004). 西洋発祥の発達理論は日本人にどれほど当てはまるか. *教育実践研究*, 12, 161-165.
- Provence, S. & Ritvo, S. (1961). Effects of Deprivation on Institutionalized Infants. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 16, 189-205.
- 斎藤環 (2012). 生き延びるためのラカン. 筑摩書房.
- Sherman, M., & Hertzog, M.E. (1983). Treasured object use: A cognitive and developmental marker. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 22, 541-544.
- Stern, D. (1985) *The interpersonal world of the infant*. New York: Basic Books. 小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳)(1989). 乳児の対人世界. 岩崎学術出版社.
- Steude, P.G. (1985). Teenage teddybears: Recognition and utilization of transitional objects in the treatment of adolescents. *Psychiatric Forum*, 13(2), 21-27.
- Stevenson, O. (1954). The first treasured possession. *Psychoanalytic Study of the Child*, 9, 199-217.
- Tabin, J.K. (2005). *Transitional Objects in Play Therapy with Adolescents*. Washington, D.C.: Jason Aronson.
- 富田昌平 (2007). 乳幼児期の移行対象と指しゃぶりに関する調査研究. *中国学園紀要*, 6, 127-138.

- Triebenbacher, S.L. & Tegano, D.W. (1993). Children's use of transitional objects during daily separations from significant caregivers. *Perceptual and Motor Skills*, 76, 89-90.
- 牛島定信 (1982). 過渡対象をめぐって. 精神分析研究, 26, 1, 1-9.
- Winnicott, D.W. (1953). Transitional objects and transitional phenomena: A study of the first not-me possession. *International Journal of Psychoanalysis*, 34, 89-97.
- Winnicott, D.W. (1971). *Playing and Reality*. London: Tavistock Publications. 橋本雅夫 (訳)(1979). 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.
- Winnicott, D.W. (1975). *Through paediatrics to psycho-analysis*. New York: Basic Books. 北山修 (監訳)(1990). 児童分析から精神分析へ. 岩崎学術出版社.
- Wolf, A.W. & Lozoff, B.J. (1989). Object attachment, thumbsucking, and the passage to sleep. *Journal of the American Academy of the Child and Adolescent Psychiatry*, 28(2), 287-292.
- 山下親子 (2009). 憤怒と抑うつ感に苦しむ男性の変容過程. 心理臨床学研究, 26(6), 675-686.